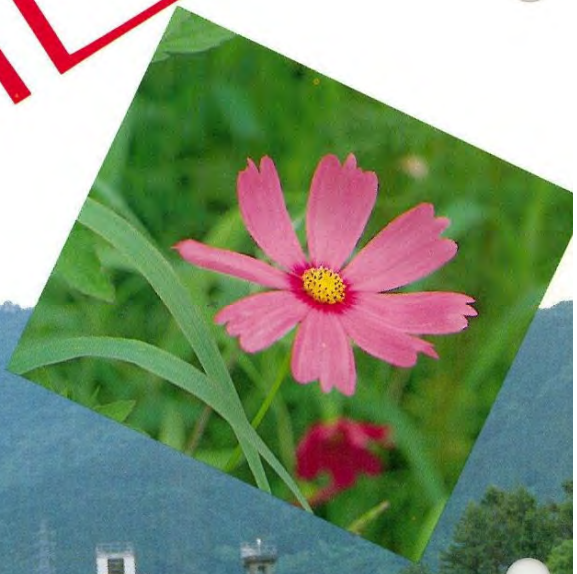
《四国の川を考える会》

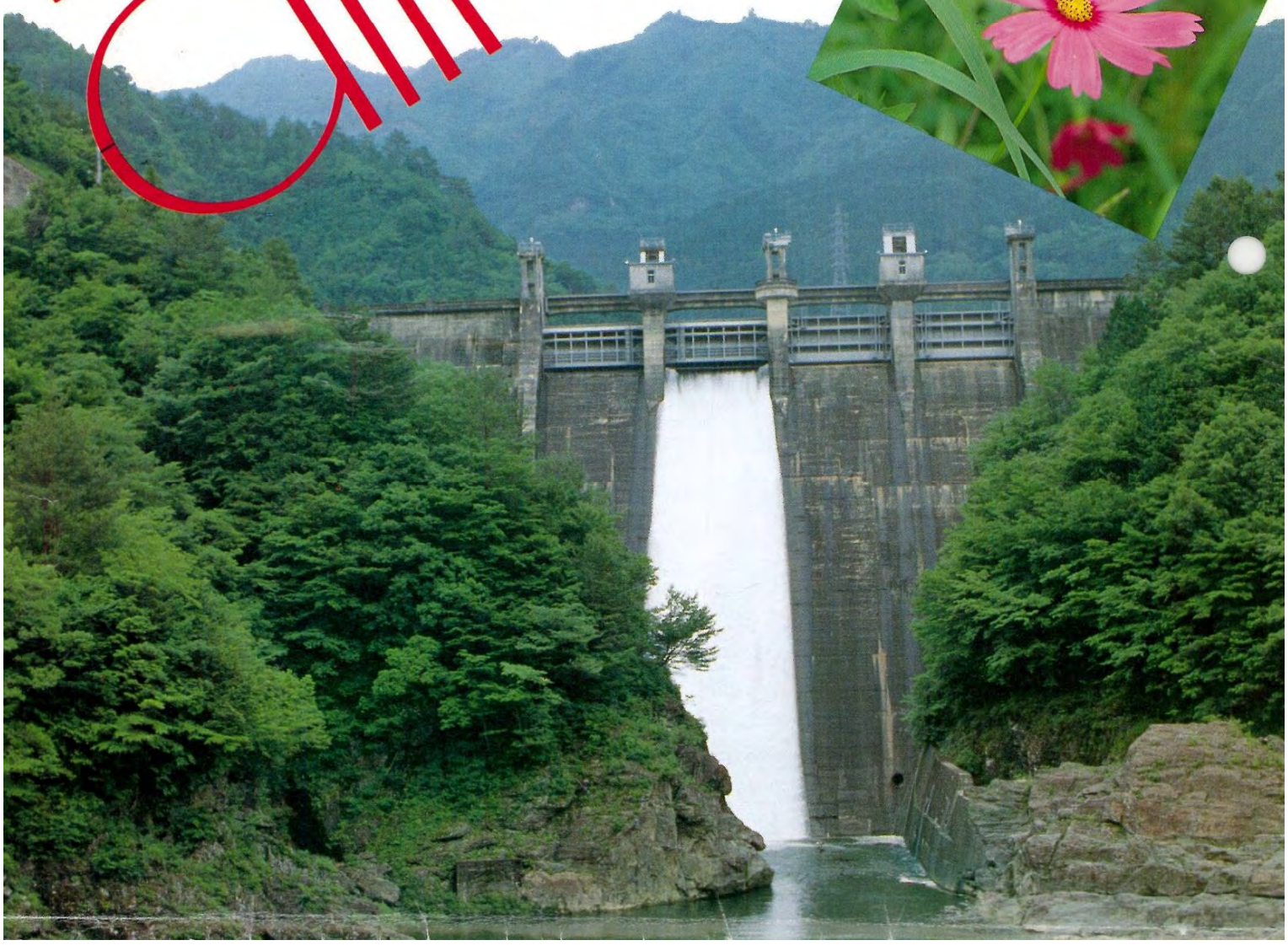
APRIL. 1989 Vol. 10

川の情報紙

あめんぼ

10号記念特集号





四国の川を考える会・会長　三井　宏

吉野川の水はどこから来るの?

「雨が川になるのはガッコで習ったけれど、吉野川みたいな大きい川が雨だけで、できるわけないよ。きっと、山のテッペンにある穴から水が吹き出しているんでしょ。」

「じゃ、その水はどこから来るの?」

「ウーン。やっぱり先生が言われたとおりかな。」

これは中学生時代の豚児との問答である。似たような話が海にもある。波のもとは風だと説明しても、一般の大人の半数ぐらいは、さざ波ならそうだが、あんな大きい波がこんな風で起きるわけがないと思っている。

明治維新以後、土地の私有を基本として近代日本国家は出発したが、水は公共の物とした。日本国家はその時代ごとの要請に応じて治山、治水、水力発電や農業用水、都市用水の供給に努力してきた。このような水問題は難解な点が多く、どちらかと言えば専門家まかせであったため、気が付いてみると、冒頭のような事態になってしまっていた。

昭和60年代になって、親水という概念が急速に具体化し、私たちの関心が水辺に向いてきた。治水、利水、親水は相互に矛盾することが多いが、技術的に両立できることも多い。そのためには、生態系、郷土史、景観などの専門家と河川技術者との交流が必要で、また、住民、企業、行政機関の相互理解も大切である。

このような交流と相互理解のために発行した機関紙が、はや10号となった。かく言う私も、おかげで多くの人と交流を持てた。末筆ながら、「あめんぼ」の編集、発行、配布に地道に協力されている方がたに、厚くお礼申し上げます。

四国治水期成同盟連合会長　近田宣秋

わたし達の川は私達で。

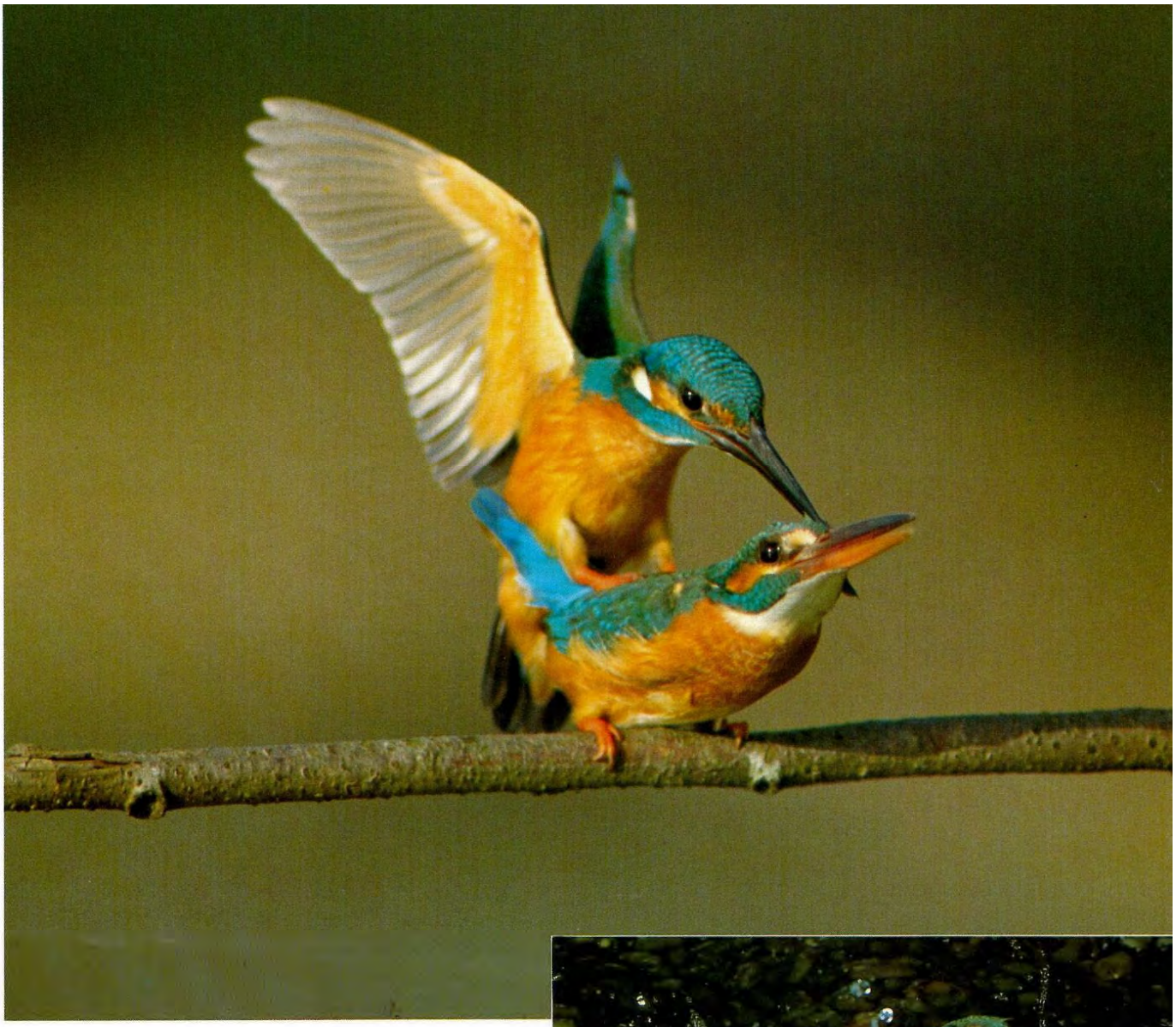
四国の川を考える会が「あめんぼ」を発行するようになって第10号になりました。川に対する正しい情報を伝えることと、美しい自然と安全な住環境づくりに、皆さんの理解と協力を得るのが目的でした。今迄の各号で紹介されているように、川に対する理解と新しい動きが、各地域で芽生えてまいりました。誠によろこばしい限りです。第十号発行に当り今後の治水施設整備推進について二つのことをお願いいたします。

私達は、治水施設対策としては二つの点をめざしております。その一つは、安全性の問題であります。二つめは、潤いと親しみのある水辺環境づくりであります。

一番の問題については、四国は水害を起こし易い気候と風土の条件下にあるものですから、過去に各河川とも大災害を発生させております。

従って各河川とも治水対策に努力していますが、残念ながら、堤防整備状況が40%程度です。道路の様に特定財源を持って対処する様な認識がないと大変であると思います。

第二の問題は、水辺環境を水と親しめるものにすることと、魚の住める様な美しい川にすることです。この面は工業化社会の中でともすると見失われていました。然し各地でその様な動きが芽生えていることは喜ばしいことです。これに対する国の予算も大切ですが、地域住民の積極的参加と協力も大切です。私達の川です。各地で各種のイベントや活動が展開されるように一層の努力をお願いいたします。



感動的な交尾風景

重信川のカワセミ

●1984年5月号VOL.1に掲載

松山市民が野鳥の宝庫と親しむ重信川。流域にセキレイ、ヒヨドリ、コサギ、ムクドリなどの野鳥が遊び、最近ではるり色の背が美しいカワセミの姿も増えて来ている。

「あめんぼ」第一号を劇的なカワセミの写真で飾ったカメラマン立川純さん㉞は、その後もカワセミを追い続け、交尾の瞬間の撮影にも成功している。カワセミに魅せられて8年、習性を研究しながら毎日のように重信川に通った執念のなせる業だろう。

汚れた川には住めないカワセミ。農薬の乱用で川の小魚が死に、エサを失って一時は幻の鳥とも呼ばれていた。このところ農薬汚染は減り、ハヤ、オイカワなどの小魚が増えるとともに、カワセミの姿も簡単に見られるようになっている。立川さんは「5年前は見つけるのも苦労したものです。1日いても巡り会えないのが普通だった。」と振り返る。

カワセミは3月初めから繁殖期に入る。常に単独で行動する習性を持ち、繁殖期だけつがいになるが、子育てが終わると雌雄が別れて再び単独で生活する。雄が雌にエサを与えて雌が受け取るとつがい成立のサイン。雌が食べやすいよう必らず魚の頭を前に差し出す。繁殖期には「チッキーチッキーチチチチー」の鳴き声も俄然甲高くなるという。

野鳥を愛するカメラマンの目で鋭く、そして優しくカワセミを見守る立川さんは「一つ一つの動作に感動を覚える。これからもずっと狙うことになるでしょう。きれいな水たまりとエサ場が続くことを願っています。」と物静かに話す。

立川　純

●カメラマン

愉快なトンボ王国構想

中村市のトンボ

●1984年11月号VOL.2に掲載

清流四万十川沿いに愉快な発想の「トンボ王国」建設が進んでいる。中村市田黒池田谷のトンボ自然公園作りはほぼ完成段階を迎え、来年4月にオープンする世界初のトンボ博物館とともに「トンボ王国」が生まれる。

中村市は国内203種のうち79種が生息する日本一のトンボの楽園。かわいいトンボを守るため昭和60年夏に「トンボと自然を考える会」を作ると、たちまちブームに。仲間たちは全国から、そしてブラジルからもトンボのようにスイスイ集まり千人を超えた。

トンボの園を買い上げるナショナルトラスト運動も順調で、現在3.2㌶の楽園を確保している。冬期の池掘りには毎回百人以上の協力者が現れる。四季の花咲く自然公園に、早くも69種のトンボが遊んでいる。

考える会の運動は自然保護にとどまらず、一つの産業として観光経済効果も生み始めている。中村市は今、本物のトンボをはじめ、ビーズトンボ、バッジ、橋の看板から考える会常務理事、杉村光俊さん㉞のような自称"世界一珍種のトンボ人間"までさまざまなトンボがあふれる。朝日新聞社が応援する写真コンテストも夏の話題を提供。一瞬にかけた作品が全国から寄せられている。トンボたちは足摺観光客まで引き込む勢いだ。

25年もトンボと付き合う杉村さんは「トンボは季節を早く教えてくれる。トンボで桜の開花を知るなんて、ぜいたくでしょう。」と魅力を明かす。取材した3月14日、過去の記録より1日早くアジアイトトンボを発見すると驚くべきことに、翌日、高知城の桜が観測史上最も早く開花発表になった。

日本一多いトンボと四万十川の悠久の流れ。「トンボ王国」中村市はトンボと人間のさわやかなふれあいがどこまでも広がっている。

杉村光俊　●㈱トンボと自然を考える会常務理事
●日本蜻蛉学会会員
●高知県中村市在住

再び逢えた生物たち。清流と水辺の主人公が四国を彩る。

あめんぼ10号記念特集"あの感動を追って"

清流戻り楽園広がる

鮎喰川のカジカ

●1987年6月号VOL.7に掲載

徳島市から鮎喰川をさかのぼること約30㌔。徳島県名西郡神山町は四国山地東部の山々に囲まれ、静かに時を刻んでいる。

春まだ浅い「カジカの里」は、満開の梅に埋もれていた。町内で十数本の支流を集める鮎喰川の流れは、すでに明るい陽光にきらめく。二年前に登場していただいた"カジカおじさん"元徳島県社会教育長、後藤弘文さん(70)の顔が笑っている。

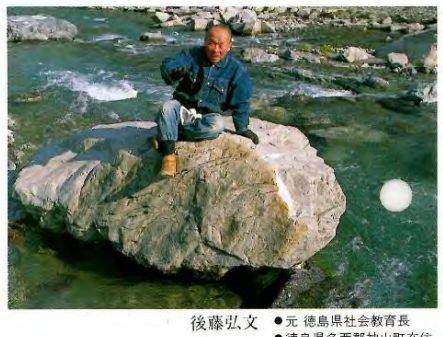
「どうです。これが鮎喰川です。」

神山町の顔、鮎喰川に本来の清流がよみがえった喜びを隠さない。後藤さんが「あめんぼ」で紹介したカジカの話題がきっかけで、神山町挙げての鮎喰川クリーン作戦が始まり、町民の河川保護意識も急上昇。アシやヨモギがはびこり、一部でヘドロのような水たまりも見られた鮎喰川は二年の間にすっかり昔の姿を取り戻している。

鮎喰川から少し山あいに入った湿田で、カジカの仲間アカガエルのオタマジャクシが無数に泳いでいる。カジカの登場は少し遅れて桜が満開のころ。産卵のラブコールともいえる雄の鳴き声が聞こえる。

清流を好むカジカ。川がきれいになり安全な住み処も徐々に広がる。後藤さんは「ここ二年ほどカジカが増えている。今年は川の条件もよく、支流だけでなく鮎喰川本流でもカジカの鳴き声が聞こえるはず。」と、太鼓判を押しながら、九月末まで続くカジカのコンサートを楽しみにしている。

清流に誘われて水辺に遊ぶと、どこからともなく「ホロホロ、ホロホロ、ホロホロ」。カジカの鳴き声とも後藤さんの喜びの声ともつかぬいい音が耳に届いて来るようだ。



後藤弘文 ●元 徳島県社会教育長 ●徳島県名西郡神山町在住

塩業史の生き証人

アッケシソウ

●1985年11月号VOL.4に掲載

瀬戸内海の塩田跡地にアッケシソウが芽ぶき始めた。北海道東部の海岸に自生するアッケシソウが、いつのころかはるか塩の道に乗って香川県の塩田にたどり着き、毎年秋の終わりに燃えるようなサンゴ色を見せている。

アッケシソウは一年草の塩生植物。自生地の北海道では単に一つの野草で片づけられるが、北海道以外で観察できるのは日本で瀬戸内沿岸、しかも香川県側だけとなると話は別。その香川県でも自生地が年とともに減り、保存論議が熱を帯びて来た。

香川県で最大の自生地は坂出市王越町の木沢塩田跡地。昭和47年に製塩を中止した塩田跡地の約6haにわたってアッケシソウが群生する。アッケシソウの権威で前香川大学教授の国分寛さん(63)は「ここは土壌に適当な塩分濃度が残っており、当分は自生が続くでしょう。塩分濃度さえ維持できれば、アッケシソウの成長条件は北海道よりむしろ恵まれている。」と分析する。しかし跡地の道路側ではブルドーザーがアッケシソウの群生地に無残に土砂を押し込む風景も。国分先生の目が複雑に曇る。香川県の天然記念物指定を受けていた、高松市屋島塩田跡地の群落はすっかり姿を消し、昭和63年12月に指定解除の憂き目を見た。詫間町のものはゴルフ場敷地内にあるため心配は少ないが、広大な遊休地になっている坂出の木沢塩田跡地は、いつまでもこの環境が保護されるとは限らない。

国分先生は「ここに塩田歴史公園を作り、日本の製塩史の集大成を展示したら面白い。アッケシソウは瀬戸内と北海道に塩の交流があった唯一の生き証人。公園の中に群落を整備すれば、美しい海岸線とともに観光の目玉になるだろうな。」と、夢を語っている。

国分 寛 ●前香川大学教授 ●香川生物学会会長 ●香川県高松市在住

守りたい自然の水族館

岩松川が熱い

南予生物研究会

愛媛県の南子地方には豊かな四国の自然が残っている。恵まれた南子の環境を自然破壊から守り、生物の正確な記録を残そうと、昭和59年11月、生物愛好者たちが南子生物研究会を結成した。

約50人の会員たちは海、山、川それぞれのテーマで研究を進め、すでに会誌4号まで発行している。研究会活動は現在のところ会員個々に行っており、今は採集、記録の段階。将来は組織的な研究で自然保護活動や学会発表にまで拡大したいと盛り上がっている。

研究会代表の辻幸一さんは岩松川を舞台にハゼやヨウジウオの生態研究を続け、図鑑にも収録される成果を挙げている。辻さんの研究を中心に、小さいながらも魚種の多い岩松川の魅力を探ってみた。宇和海に面する愛媛県北宇和郡津島町を岩松川が流れている。四国南西部の山岳地帯に源流を持つ流程約15㎞の小河川である。

岩松川では純淡水魚と海から移動する魚を含めて約50種の生息が確認されている。特に珍しい魚がいるわけではない。四万十川など大きい河川ではここにいるほとんどの魚種が確認されているが、こんな小さい川に50種類もの魚が住んでいる事実に興味は尽きない。生きた"魚の博物館"さながらの魅力的な河川である。

愛媛県立宇和島高校の辻幸一教諭(53)は、この川の多彩な魚種に魅せられ、十年間にわたって調査研究を続けている。

河口にいるガンテンイシヨウジも豊富な魚種のうちの一つ。ヨウジウオ目ヨウジウオ科で、おなじみのタツノオトシゴと同じ仲間。初めて見る人は必ず驚くほど変わった形をしている。成魚は体長約15㎝になり、名前の通り長い楊枝を連想させる。雌が雄の腹部の育児のうに卵を産みつけ、雄が育てて孵化させる生態を持っている。辻さんは日本産稚魚図鑑(東海大学出版会)にガンテンイシヨウジを報告、ヨウジウオ研究に貢献している。

岩松川にこだわる辻さんは、中流域の河川改修による魚種の減少や生態系の変化を心配する。シロウオやオオウナギで知られる岩松川だが、オオウナギが姿を消してすでに久しい。1981年12月21日、中流で仮死状態のオオウナギが発見されて以降、生存の確認はない。

上流の山彩ダム建設や中流の川底を平らに浚えたことで、岩松川の環境は大きく様変わりした。辻さんは「岩松川は小さくても魚の種類が多い理想的な川だった。生息するオオウナギが住める状態ではない。河口付近が自然のまま保存されているのが救いだが、中流域で土洞や瀬を作り、魚が住めるような環境を取り戻すべきだ」と強調する。

岩松川の豊かな魚種が全流域で泳ぎ回り、オオウナギが再び姿を見せる日はいつの日のことだろう。辻さんの言葉に「しかたがない」では片づけたくない気持ちが感じられるようだ。

ふるさとの川を創ろう

せせらぎ・ふれあい基金

うさぎ追いしかの山　こぶな釣りしかの川
夢は今もめぐりて　忘れ難きふるさと

今、時代はふるさと一色

今年は年賀葉書の賞品として、ふるさと小包が選ばれている、この小包は過疎に悩む町や村が一村一品運動によって作り出した地場産品をふるさとを離れた都会の人々に購入してもらうことによって、地域経済の振興をねらったものである。

また、なにもふるさとは田舎とは限らない。「マイタウン東京」と、「好きやれん大阪」に見られるように、都会の中に生まれ育った世代が多くなるにしたがって、都会もふるさとの対象となってきた。

高度経済成長の中で、ふるさとを忘れ、踏みつぶされてきた日本人が世界最高水準の経済的豊かさを享受できるようになり、ようやく落ちつきを取り戻した今、豊かさとゆとりが実感できる国民生活を求めて、全国各地でふるさとづくりが始まろうとしている。

ふるさとづくりは川づくり

竹下首相が提唱する「ふるさと創生」に触発されて地域活性化に関し、色々な議論がなされている。この中で"風土と生活文化を育んできた河川からの視点も重要ではないだろうか。

日本人は稲作民族であり、大昔から川と深く結びついた生活を営んできた。川と共存共栄を図ることによって、文明を発展させてきた歴史を持っているといっても過言ではない。

しかし、近代化の中で"川とのつきあい"が少なくなり、川はまさの裏側とされ、じゃまもの扱いされた。近年の都市化の著しい進展は水災害に対する危険を増大し、河川環境を著しく悪化させた。現在、ウォーターフロントの時代を反映し、川の役割が再評価されているが、過去の反省から川との関わり方を見つめ直してみる必要があるのではなかろうか。

また、「ふるさと創生」は「自ら住む地域を『ふるさと』と感じることができるような充実した生活と活動の基盤をつくり、真の豊かさを目指す」ものである。豊かな生活の基礎条件を満たすためには、災害に脆弱な河川構造に対し治水事業の促進による安全な国土の形成や、社会の発展に向けて水資源開発やうるおいとやすらぎのある水辺空間の整備を進めていくことが必要である。

建設省においても、ふるさとの川モデル事業などの施策によって地元のニーズに答えるよう努力をはじめている。しかし、財政上の問題もあり、国だけの力で対応するのは不十分であり、民間の協力を得て緊急に整備を進めることが重要な課題となっている。

せせらぎ・ふれあい基金の創設

官・学・民が協力して、河川等の整備を推進するため、せせらぎ・ふれあい基金(河川整備基金)が昭和63年3月につくられた。

この基金は市民からの善意の拠出によって5年間に300億円を造成することを目標とし、昨年末から河川敷を利用したイベント開催時などの募金をはじめとして募金活動が進められている。

基金ではその運用益(利息)により、次のような事業を実施する予定となっている。

①国民的啓発運動に対する助成

日常生活の中で、ふとふれあう機会がしたいに少なくなっている地域住民に川やダムと接し、知識と愛着を深めていくことのできる機会を提供する。

②環境整備対策に対する助成

人の気持ちを快適にする水辺(河原、湖畔、渓流あるいは海岸線など)は貴重な空間であり、これをやりより快適なものとするための住民の要望を実現する。

③　調査・試験・研究に対する助成

都市、山間部を問わず、地域の重要な構成要素となっている河川を活用し、地域を活性化するために英知を結集する。

このように川と水を通じて豊かなくらしをつくるための諸活動に対して助成金が支給されることとなっている。

ドブ川からふるさとの川へ

水缺に恵まれ、自然にふれあえる貴重な公共空間として、河川の果たす役割はますます高まってきている。今まで危険なドブ川として、住民から疎遠となっていた河川もふるさとの選ばれて、子供の頃遊んだ"豊かで美しくうるおいのある川"へ再生させようとする動きが全国各地でみられるようになった。公共事業で行われる河川改修だけに頼るのではなく、河川愛護のボランティア活動を行う市民のグループも現れてきている。

これらの活動を支援するため、ラブリバー制度のような国の施策も展開されているが、これらを補完し、ふるさとの川を創り上げていくためには、せせらぎ・ふれあい基金が一刻も早く造成され、その活動を本格的に開始することに大きな期待が寄せられている。

河野幸夫
●戸波郷土古墳資料・徳島吉野川紺水辺空間整備計画検討委員
●主な著書「徳島城の歴史」「徳島・城下町もの歴史」「城出物語」など

新町川、今むかし。

■絵図Ⅰ　慶長期前代御城下絵図　—1640年ごろ—

■絵図Ⅱ　寛政期前代御城下絵図　—1652年ごろ

徳島城と新町川

600年の昔、時の四国管領の地位にあった武将・細川頼之は、新町川の河口を利用した港町(津)を「富津(いのつ)」と命名した。

天正13年(1585年)、阿波の領主となった蜂須賀家政は、富津を「徳島」と改め、城を築き、城下町をつくって領国経営の拠点とした。

この時、築城の縄張(設計)に当たった武市佐弘(宗三)は、「新町川や助任川は100年もたてば、水は濁れて陸地同然となり、城の防備には役に立たなくなる」として、他に適地を選ぶよう進言した。これに対して家政は、「あるいはそうなるかも知れないが、100年後になると、世は太平となり、河川の役割もおのずから変わってくるであろう」とその進言を しりぞけた。

家政の先見の明をたたえる話として、有名であるが、先見の明の有無はさておき、家政の"地決定の"新町川や助任川の存在は大きい要素の一つであったことだけは確かである。

特に城下町づくりに当たって、新町川の水運を重視し、その右岸と富田との間の地を、商業を営もうとする者に分け与え、新しい町人町をつくった。徳島城内に設けた"侍屋敷人の町を"内町(うちまち)"と呼んだのに対して、この新しい町人町は"新町(しんまち)"と呼ばれた。

築城後、およそ100年の間に、新町、特に新町川沿いの東西桟橋町(船場は舟着き場)が急速に発展していく。それは二つの城下町絵図(絵図Ⅰ~Ⅱ)と、貞享2年(1685年)の町家数表(表Ⅰ)によって容易に知ることができる。

表Ⅰ　城下町の町家数　—貞享2年

町　名	戸　数	町の長さ
東船場片町	5戸	
西船場片町	18戸	
新町東船場片町	11戸	4町 00間
新町西船場片町	49戸	4町 27間

産業と新町川

藩の奨励によって、芳水七郎・吉野川中下流域の農作は、徳島藩領の一番をだとった。生産された藍玉や茣(すげ)は、吉野川やその支流を利用して河口の津田、大阪、富島、堺港などの諸港から、国内各国に移出された。

壬永2年(1625年)、藩は城下の要場の流(今の藍場町)に藍方役所を開設した。さらに文化元年(1804年)、新町西船場に藍問屋が新設され、阿波藍の大市が栄かれるようになったので、徳島城下は近世最大の藍産地となった。

それ以後、明治に至るまで、船場は徳島を はじめとして国産の藍、染料、たばこなどの積み出し、干鰯(ほしか)、醤油などの肥料、その他、日用雑貨の移入など、物資の一大集散地として繁栄した。

交通と新町川

明治の維新になって、外国から輸入された洋風のもに、阿波藍は販路を奪われ、藍作は一気に衰退した。舟運の運賃にかかって、船舶も和船から大きの蒸気船が使用されるようになったので、船着き場も都心部の新町橋通から、富田浜・中洲へと次第に新町川下りていった。

一方、近代交通の花形として登場した鉄道も、明治32年に徳島 ―川島間に開通して、陸上交通が水上交通にとって代わる時代が到来した。しかし、東西の方向に流れる吉野川とその分流は、南北を縦断交通の上で、大きいまちがとなった。

それを逆手にとって、新町の目のような吉野川水系を利用して、小型機船を運行して人や物を運ぶ、新しい交通機関が登場してきた。いわゆる"早船"とか"通船船"と呼ばれたものて、新町川の富田橋・新町橋付近の浜から、津喪(鳴門市)・徳永(松茂町)・名田(藍住町)・中原(応神町)などへの定期航路が開設され、新町川はまた、新しい役割をもって市民の前に登場してきた。

市民生活と新町川

少なくとも昭和前期までの新町川は、市民にとっては身近な存在であった。川幅が広く潮の干満につれて、それぞれに市民とのかかわりの場があった。水もきれいで豊富、川漁を専業とする漁夫がいた。

魚市の並ぶ川岸でも、倉庫街に専用のガンギ(荷の揚げ下ろしに用いた石段)があり、ところどころに公共の荷揚げ場(CC)設といった)があって、川と直結していた。また、竹ヤブやカヤ原はそのまま川へ続き、川は極めて身近な存在であった。

都心部に広大な空間を占有する新町川は また、全市的な大イベントの場となった。真夏の祭典の天神まつりの船渡御をはじめ、盆踊り、汚松会社の花火大会、赤社な冬の寒中水泳などには、新町川の両岸は人で埋まったものであった。まだまだこの頃には、川の両岸にも自然がいっぱいのあった。竹ヤブやカヤ原は野鳥のねぐらとなり、両岸の低い土手には、美しい松並木や桜並木が見られた。

市民から引き離された川

海に近い新町川やその他の市内の河川は、水質が木材の水面貯木に好適であったので、どの河川の水面も木材で埋まっていた。この木材の大集散地に木工業が地場産業として興った。ところが河川美化と災害防止のためもに、河川貯木が禁止されたので、木材業者は貨品展示の場を失った。河川環境の第一歩であった。

日本経済の高度成長政策によって、各企業は工場を増設し、そこからの排水が市内河川の水質汚濁の度を深めた。また、物資の重さから輸の使い捨ての風潮などが、船運振興処理運営の遅れは、河川をチリアクタの捨て場化していった。きたない水、よごれた川に、人々はもう見向きもしなくなった。

市民の河川離れを決定的にしたのが、昭和36年9月16日、徳島県を直撃した第二室戸台風であった。高潮のため市内河川はいたる所で氾濫し、市内の81%の住宅が、床上または床下浸水となった。この大災害において、市内の河川の四面堤は、高い防衛線が築けられた。これは治水上、やむを得ない措置ではあったが、河川は市民から遠く離れた存在になってしまった。

よみがえれ新町川

最近になって、やっと市内の川を市民に近づけようとする運動が高まってきた。

徳島市は、その手始めとして新町川北岸の貯蓄地帯を「水に親しむ公園」に改修している。さらに助任川北岸の一部で、無秩なコンクリートの防潮堤を取り除き、水辺へのアプローチを工夫した、自然に近い水辺づくりにも着手している。

なぜ、市民と川が隔離されてしまったのか、その要因をコツコツと掘さくし、それを「幸に取り除いていく努力こそ、川が、新町川が、市民の手に呼び かえされる唯一の方法だと、私は思っている。

かつて盛喜を誇った、阿人・与瀬鉄路は、新町川に影をうつした日暮遠山の芸者を見て、

『オランダの芝居の如く(私にあり)
　看板の妻の白き前垂』

と詠んだこの景観を呼びもどすわけはないが、また新しい新町川の景観に感動して詠唄する歌人のあることを折ってやまない。

生き来する上荷船と商船場(新町川南岸)の賑金(昭和初期)

豊漁の浜(新町川北岸)の魚揚群と漁船船(大正末期)

●写真提供/徳島新聞社

4県ジャーナル

あなたの、川です。みんなの、川です。

愛媛県

御三戸嶽

仁淀川水系の久万川が南下して面河川に合流し、流れが一つになるところに御三戸嶽が厳然とそびえ立っている。

ここは、土浮穴郡美川村御三戸、三方を清流に囲まれた眺めは、国道33号線沿線の中でも有数の景勝地となっている。

この御三戸嶽は、高さ37m、幅137mの石灰岩の岩壁で岩肌には松、カエデなどの広木が繁茂しており、他のような形から"軍艦岩"と呼ばれたり、温度によって岩の色が1日に3回変わると言われ、"七面鳥岩"とも呼ばれている。

美川村役場下の面河川では、貸ボートやキャンプの施設、夜間に御三戸嶽を照らす照明灯などが整備されており、また昭和62年度から県単事業により御三戸の景観を十分に配慮した自然石遊歩道の整備を進めている。

かつての放浪俳人種田山頭火をして…そこの巨大なる夫婦岩(御三戸嶽)は、奥地の風景の母音でなからうことを思はせるに十分である…」その神秘的なイメージで感銘させた御三戸嶽は、観光開発の中でも昔の姿を失うことなく、毅然たる態度でいつも皆様方のお越しをお待ちしています。

香川県

ふるさとの川 相引川

二級河川相引川は、高松市街の北東部に位置する史跡に恵まれた景勝地帯為る

U字形に囲み、上下流の区別のつかない河口を一つ持つ特異な河川である。

その名は、川の形状からも思えるが、源平屋島合戦のおり、両軍がここで激戦を繰り広げた寸ん時員がつかずとも(相)に引き分けたことに由来しているとの説もある。

かつては、全区間が感潮河川であり生駒時代には塩田地帯として栄え、その塩の運搬のため舟運が盛んであり、初代高松領主松平頼重の時にはほぼ現在のような姿となった。

昭和57年度からは小規模河川改修事業で整備を進めてきたが、沿川周辺はベッドタウン化がすすめて著しく、地域住民より快適な環境作りを強く要望され、その周辺地域整備計画事業と一体的に良好な水辺空間の形成を図る必要のある河川として昭和63年6月には"ふるさとの川モデル事業"のモデル河川の指定を受けている。

今後は、歴史と観光の名所盟為、高度な土地利用により、ふくれあがるベッドタウン市街、相反する二つの性格を持つこの一帯に適する相引川の水辺空間の形成を進めていく計画である。

高知県

吉野川いかだ祭り

昨年の7月31日、冷夏を吹き飛ばすかのように、第6回吉野川いかだ祭りが高知県長岡郡本山町で行われた。

会場の早明浦ダムの直下流に集まったチームは、過去最高の29チームで、それぞれタイヤチューブや竹、ベニヤ板などを材料にした手造りのいかだで参加している。競技は、早明浦ダム直下流より4.0km区間のタイムを競う。いかだは材料によって、竹と木を使った"元祖いかだ下り"と自由な材料を使う"フリースタイル"の2つに分けられる。レースは、午後1時にスタート。電源開発の造力放流で増水した川をゆっくり進む。途中、浅瀬や急流で転覆すればかならずあったが、ほとんどが"半時間から1時間半ぐらいでルインした。優勝は"元祖いかだ下り"部門では、上下関チームでタイムは30分53秒。"フリースタイル"では、古廷オールスター号が28分1秒のタイムで"優勝"。また、他の形のいかだで参加したチームが、アイデア賞を獲得した。

この祭りの目的は地域の活性化で、手造りのいかだであれば、大きさと乗員数のみの制限で参加は自由。本山町商工会では、広く挑戦者を募集しているとのことである。

徳島県

「800mのパフォーマンス」

那賀川の愛称命名一周年を記念して「阿波の八郎まつり」が昭和63年8月21日、那賀川の河川敷で開かれ、メーンイベントの超特大巻きずしに挑戦した。

この巻きずしは、米500kg、のり95,000枚を使い、参加者約2,000人が心を一つにしてギネス級の800mを巻き上げたもので、完成したばかりの選手の上に板を敷き詰め、10mに20人ずつが順ぎりして、のりを敷いてごはん、チクワ、タクワン等をのせ、花火を合図に巻き始めた。